

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2024
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.29 (2024. 7) ,p.150- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20240701-0150">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20240701-0150</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

## 著者リプライ

浜 日出夫

---

拙著の書評を引き受けてくださり、ていねいなコメントをいただいた渡辺さんに感謝申し上げます。

ご指摘いただいた図表の出所表記につきましては、筆者の不注意とチェックミスによるもので重版の機会がありましたら修正したいと思います。そもそも筆者は家族社会学者でも、教育社会学者でもなく、また都市社会学者でも、階層研究者でもありません。本書における筆者の役割は「サイエンス・コミュニケーター」というべきものと考えています。「サイエンス・コミュニケーター」は科学博物館などで研究者の研究成果を踏まえた展示を入館者に解説する専門職です。本書は各分野の社会学研究者の研究成果を学生、さらには一般読者にできるだけわかりやすく解説しようとするもので、もとより専門の研究者とオリジナリティを競おうとするものではありません。本書になにかオリジナリティがあるとすれば、戦後日本社会を描くためにどの研究者の仕事を選ぶかということだけだと思いますが、この点については合格点をいただけたようで安堵しました。

本書は映画「ALWAYS 三丁目の夕日」に六子の履歴書が出てこなければ書けませんでした。そこには1943年10月21日に青森県北津軽郡板柳町で生まれたと書かれていました。そして1958年中学校を卒業すると集団就職列車に乗って高度経済成長が始まったばかりの東京にやってきます。生年月日がわかれば、その後何歳で結婚したのか、結婚相手は何歳だったのか、何歳のときに子どもが生まれたのか、子どもは何人だったのかなどが、「平均値」として得られます。六子は永山則夫と同郷ですが——永山は六子の7年後同じように集団就職列車で東京にやってきます——見田宗介が「極限值」としての永山を描いたのに対して、本書では「平均値」としての六子とその家族を描くことにしました。六子の長女・直美はバブル崩壊後の「失われた三〇年」に家族を形成しますし、長男の誠が大学を卒業した年には「就職氷河期」が流行語になっていました。ちょうどNHKの「無縁社会」(2010年)を見て「他人事ではない」とつぶやいた世代です。六子の家族三代のファミリー・ヒストリーを通して、「ALWAYS」から「無縁社会」への約半世紀の日本社会の変化をたどりました。

入口が六子の履歴書だったとすれば、出口は渡辺さんの書かれた文章に決めていました。「おわりに」では渡辺さんの次の文章を引用しました。

「映画『ALWAYS 続 三丁目の夕日』(2007年)は、近代家族の完成以前の昭和30年代への郷愁として描かれていると評されるが、実は、近代家族以後のあらたな関係をも提示していると考えたい。それは、売れない作家の茶川と、実子ではない淳之介、そして、(小雪が演じる)踊り子のヒロミとの間に結ばれる絆である。近代家族とは異なる、いわば多様な家族のありかた(家族と呼ばなくともよい、あらたな関係)が提示されている。」(渡辺秀樹「絆のゆくえ 家族と地域のつながりをつくる」岩上真珠・鈴木岩弓・森謙二・渡辺秀樹『いま、この日本の家族』弘文

堂、180-1頁)

まさに渡辺さんならではの慧眼だと思います。「ALWAYS」で描かれた高度経済成長期の東京は「無縁死」だけは起こりそうにない社会でした。筆者の記憶でも近所の家に預けられたり預かったり、テレビを見に行かせてもらったり見に来たり、しょっちゅう他人が家を出入りしていました（小津安二郎監督の「お早よう」（1959年）でもそのような情景が描かれています）。それから半世紀を経て、雇用が不安定化し、単独世帯が増え、日本社会は「無縁社会」に変貌します。渡辺さんの文章は、「縁もゆかりもない」竜之介と淳之介とヒロミが作った「家族」が「無縁社会」において「縁もゆかりもない人同士が会おう場所」（奥村隆、浜日出夫・奥村隆「対談・戦後社会と日本の社会学を問い直す」『書齋の窓』2024年7月号、有斐閣）としての社会を可能にするものであることを示唆しています。

「ALWAYS 三丁目の夕日」を撮った山崎貴監督は、「ALWAYS」の18年後、「ゴジラ-1.0」を撮ります。「ゴジラ-1.0」はゴジラ誕生の物語であると同時に、神木隆之介・浜辺美波の朝ドラコンビが演じた、敷島浩一と大石典子と明子の「縁もゆかりもない」もう一つの「家族」の物語でした。時間的には逆ですが、「ゴジラ-1.0」で明子が描く「家族」の絵が、「ALWAYS」で淳之介が描く「家族」の絵に手渡されていきます。そして、さらに淳之介が描いた「家族」の絵が「無縁社会」の多様な形の「家族」に渡されていくことを夢想します。

最後に本書と三田の関係について小ネタを一つ。本書では、六子が就職した「鈴木オート」があった場所を地下鉄赤羽橋駅辺りと推測しました。まだ三田通りを都電三系統が走っていたころの話です（1967年撤去）。現在からは想像もできないと思いますが、三田の山を下りた古川沿いの麻布十番から赤羽橋にかけてはかつて下町と言ってよい土地でした。現在大規模な再開発が行なわれている三田小山町辺りは筆者が赴任した20年前もまだ下町の面影を残していました（町村敬志さんが1980年代に行なった小山町の調査報告があります cf. 「都心社会の変動と「まちづくり」」町村敬志『「世界都市」東京の構造転換』東京大学出版会）。竜之介と淳之介とヒロミが作った「家族」もこの辺りだったのかもしれませんが。

これからはやり残した仕事をもう少しじたばたやっっていこうと思います。

（はま ひでお 慶應義塾大学名誉教授）